

「学生の『専門意識』を活かした授業」

学校教育講座 教育心理学教室 江上園子

＜授業の目的：シラバスより＞

子どもの成長する姿、発達過程を、児童期を中心に理解する。その際、子どもの発達環境の変化なども考察する。また、とくに児童期に生じる諸問題について学習し、解決策を考える。

＜授業の到達目標：シラバスより＞

- ①子どもの発達について、その概要を理解できる。
- ②各自が児童期に生じる諸問題について考察し、解決の方向についての自分の考えを自分の言葉で表現できる。
- ③子どもや子どもをとりまく他者や環境について、関心を持って学習できる。

＜授業の概要＞

本授業は、全15回の授業であった。受講者は22名である（教育心理学専修：11名、社会科教育：2名、国語教育：2名、特別支援教育：2名、総合人間：1名、大学院：3名、科目履修生：1名）。前半の6回は教員による講義形式の授業であったが、後半の8回は学生による学習発表の場とした（最後の1回は期末試験であった）。

前半の授業は、児童期の発達を中心にしながら、乳児期から青年期まで子どもたちがどのように成長していくのか、概説した。さらに前半は毎回の授業の最後にその回の内容に関する簡単な課題を設け、それについての回答も成績評価の材料とした。後半の学生による発表の回では、児童をとりまく（あるいは児童自身の）さまざまな問題（発達障害・児童虐待・いじめ・不登校など）をテーマとして与え、学生の希望や関心からどのテーマで発表するかを割り当ててグループごとに発表を行わせた。学生の発表後には毎回、発表担当学生も含めて全員に感想を書かせた。

＜授業評価アンケートの結果について＞

最終試験の終了後、無記名式で授業評価アンケートを行った。回答は21名から得られた（残りの1名は就職試験と日程が重なり期末試験を受けられなかった；成績は後日課したレポートによる評定とした）。質問事項とそれらについての回答内容は下記の通りである。

1. 「この授業を受講して良かったと思えましたか。5件法（まったく思わない～とても思う）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、17名が5（とても思う）、4名が4（まあそう思う）という結果であった。理由としては、「児童期について深く勉強したことがなかったことで様々なことを知ることが出来て良かったと思います。」「児童期の子どもの特徴について、より詳しく学べ、将来教師になったときに、役に立つ内容だったから。」「今まで受けてきた授業内容の復習にもなり、自分で調べて発表することで知識が深く身についたことを感じる。」「現代の教育問題について、多面的な視点で学ぶことができた。私が考えていなかった視点での意見もあり、視野が広がった。」「自分で問題意識を持って学習することができました。他の人の発表や先生のお話もおもしろかったです。」などであった。

2. 「この授業の内容をどの程度理解できましたか。5件法（まったくできなかつた～かなりできた）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、3名が5（かなりできた）、14名が4（まあできた）、3名が3（どちらともいえない）、1名が2（それほどできなかつた）という結果であった。理由として、理解度が高い受講者（5と4）の場合は「自分の興味のある内容ばかりだったので、吸収したいという思い

があったから。」「スライドもわかりやすくまとめてあり、話も具体的だったので理解しやすかった。」「授業内容を発表の内容で深めることができた」「受講者の皆さんのプレゼンがとても丁寧かつ分かりやすかったので」などが挙げられていた。一方、理解度の低い受講者（3と2）の場合は「受講者の発表の部分はどこがポイントなのか分かりにくいときもあったため」「内容によって興味の度合いが違った」というものがあった。

3. 「この授業を受けて、意味があった（役に立った）点はどの程度ありますか。5件法（まったくなかった～かなりあった）で答え、どういう点に意味があったか（役に立ったか）、具体的に書いて下さい。」

この質問では、5（かなりあった）：19名、4（まああった）：2名という結果であった。具体例としては「様々な問題について事例とともに知ることができたし、発表することでいろいろ学ぶことができたため。」「これからは教師になったとき、親になったとき、役に立つことを多く学べたと思う。これから活かしてみたいというものがいくつかあった。」や、「児童期の発達や近年の教育問題が、教育実習に役立ちそうである。」「漠然としていた知識がまとまり、さらに自分が知りたいと思う分野は何なのかを考える機会になったから。」などが挙げられていた。

4. 「この授業で改善すべきところはどの程度ありますか。5件法（ほとんどない～かなりある）で答え、どこを改善した方がいいか、書いて下さい。」

この質問では、1（ほとんどない）：9名、2（それほどない）：9名、3（どちらともいえない）：2名、4（少しある）：1名という結果であった。改善点はないという受講者の記述には、「受講者が主体的に授業に参加できるところがよかったです。」「私自身、楽しみな授業のひとつだったので、ありません。むしろまた受けてみたいと思います。」などがあった。改善点が挙げられていた記述は「もう少し先生の講義を受けたかつ

たです。」「発表テーマで、自分が一番興味のあることを調べて発表したかったと少し思う。」などが見られた。

＜今年度の成果と課題＞

本授業は、子どもの発達のプロセスと成長していく過程で見られるさまざまな問題を含む内容であった。そのため、学生たちが学部1回生時にすでに学んでいる知識もあり、その復習と理解の深化、さらには諸問題に関する見方の確認や対応策の考案など行うことをねらいとしていた。前半は発達の知識の定着をはかり、後半は各テーマに関する現状の理解や対応方法の検討など、学生中心の授業をこころがけた。

その結果として、他の教職必修科目などとの関連付けや教育実習での応用法などを学生がつかんでくれたことが成果として挙げられる。さらに、学生がこれまでに自分なりにもっとも修得しており、関心を持って取り組んでいる分野である「専門」（もちろん学部生としては自分の興味のある範囲のみならずさまざまな分野のことを学ぶ必要はあるが）について、責任を持って発表をさせることで、それが大変ながらも力になったと述べていたことも評価できよう。

課題としては、第一に理解度を深めることが挙げられよう。学部生を対象としていることから、なるべく平易な言葉でわかりやすいように説明し、疑問点は毎回のコメントシートに書くように教示しそれを次回の授業で解説するなど試みたが、確かにすべての質問に時間を割いて回答することはできていなかった。また、発表するテーマについてはあらかじめこちらで設定したものの中から選ばせる方法を取っていたことから、なかには希望する発表テーマがなかった者、そして希望するテーマがあったとしても他の学生の希望を優先してしまって希望しないテーマを選択せざるを得なくなってしまった者もいたようであった。このようなことから、次年度からは学生の「専門」への意識をより考慮し、少しでも多くの学生が満足できる授業を行いたいと計画している。